

解 答

一 問一 a 類例 b 一局面 c 厳格 d 規則

問二 重要な事件や特別な人の記憶を堅牢な物質のなかに形象化して永遠に伝えようと「モニュメント」を造り出した。

問三 「季語」は、昔からの多くの思い出を担った言葉であり、その背後には、四季のめぐりとともに繰り返されるさまざまな行事によって継承された膨大な記憶の遺産がある。その記憶の力によってきわめて短い詩形である俳句が、多くの豊かな内容を表現することができるから。

問四 西欧芸術は、他者から自己自身を切り離して、自己完結的な世界を創り出すものである。同時代の仲間たちが集まって、それぞれの自己の個性を保ちながら共同して芸術制作を行うという連詩のような試みは、魂や、自我の実在への信仰といった、西洋のいくつかの本質的概念を否定することを意味するように思え、「自我の屈辱」とも感じられたから。

問五 (ア) たとえば、個性を主張するあまり、全体と自分とのかかわりや、自らの分をわきまえられない自己中心的な人が増えつつあるのが現代の社会の問題点である。過去から未来という時間軸のなかでの自らの位置づけについて明確な考えを持たず、環境破壊などをしておきながら次世代に問題を先送りして自分だけが恩恵に被ろうとしていることも、その一つである。

(イ) 日本文化の伝統が、型の継承や土地、季節、行事と結びついた記憶の遺産を支えとしているため、同時代の人々だけでなく、先人、故人とも結びついていることを自覚させるところが、自分ひとりで生きているような思い上がりを戒め、他者とのかかわりを大切にすることに結びつく。また、山や川そのものを畏敬と崇拝の対象としてきたところが、環境破壊に歯止めをかけることに通じていくと思う。

二 問一 A オ B イ

問二 やつあたり

問三 ふたりは、「ごめんね」と謝る由希の姿を見て、久美をたたき、ひどい言葉をあびせたことを反省しているのだと感じた。あえて「ひどいひどい」と表面上は責めるような言葉を口にすることで、由希の行為を深刻なものだと受け止めていない空気をつくり、由希の心の負担を軽くしている。

問四 今まで人に守られているばかりで自分の考えをはっきり言わなかった久美が、毅然とした態度を見せたうえ、由希がいつも遊んでくれておもしろかったと言った。その言葉を聞いて、自分も素直な気持ちから久美と仲良くしていたことを思い起こし、頼まれたから仲良くしてあげたのだと恩を売り、久美を自分だけのもののようと思っていたことに気づいた。友だちに対しても自分の考えを押しつけるかたくななところがあったとわかり、自分の心の狭さを恥じている。久美を傷つけてしまったことを申し訳なく思い、深く反省している。